

Title	ロシア原初年代記 はじめに
Author(s)	山口, 巖
Citation	ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 (1998): 789-793
Issue Date	1998-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/65767">http://hdl.handle.net/2433/65767</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

の一翼を担っているのだということを深く自覚することが大切だと思います。

この小冊子が、そのためにいささかの寄与をなしうるとすれば、喜びこれに過ぐるものはありません。

京都大学生生活協同組合理事長 山口 巖

『ロシア原初年代記』1987年11月28日初版第一刷。

## ロシア原初年代記

### はじめに

ここに訳出した原初年代記ラヴレンチー写本はその冒頭の言葉によってまた「過ぎし年月の物語」とも言われるが、これは一八四六年に出版された「ロシア年代記全集」の第一巻に収められていた。これはその後カールスキーによって一九二六年に新たに校訂されたテキストによって出版され、更にチホミロフによって一九六二年に復刻された。これが今回の底本となったものである。「ロシア年代記全集」は時の皇帝ニコライ一世の勅令によって編纂され、その第一巻がいま述べたように一八四六年に出版されたのであるが、これは革命の後も継承され、現在の三十七巻に及んでいる。真に国家的な事業である。

原初年代記がその第一巻に収められていることから容易に推察できるように、これは諸年代記のうちで最も資料的価値の高いものである。それはこれがロシアの地で最初に成立したキエフ国家について、その起源から説き起こした伝存する最古の年代記だと言うだけではなく、その内容においても伝説あり、戦記的部分あり、物語的部分あるいは神学的部分ありというように、真に古代ロシアの百科全書とも言うべき多彩さと内容の豊かさを誇り、また文学的香気にも富んでいる、第一級の文献であるからに外ならない。この原初年代記を抜きにしてはロシアの古代について語ることはできないといっても過言ではない。

歴史の面においてもこれが中心的な資料であることは当然であって、ここに記されている記事をどのように読みとるかがきわめて重要な作業となっている。今日でもその「読み」を通じて当時のロシアの状況を明らかにしようとする論文が次々と世に問われていることはこのことを示す何よりの証拠であろう。

この年代記の底を貫いて流れている基本的な思想は、ルシの統一という理念である。ルシの国に奉仕しその安寧をはかり、その名誉を重んじてこれを追求する、これが年代記作者の一貫した立場であった。しかしこのような愛国的な至情にもかかわらず、年代記作者の目は冷徹であって、そのためにあるがままの現実を粉飾し、歪曲することはなかった。そこでは好ましい事件も、また忌むべき事件も共に記述され、それぞれが年代記作者によって評価されるという形をとっているのである。これが一つにはこの年代記の資料的価値を高からしめている理由でもあり、また他面では事件あるいは人物の描写がきわめてリアルである理由ともなっている。

例えばキリスト教を国教にし、聖公と崇められているヴラヂミルすらも、すべてを美化して描かれてはいない。改宗するまでの彼の数多くの悪徳もまた、年代記作者の筆を逃れてはいないのである。賢公といわれたヤロスラフもまた過ちから無縁ではなかった。それは例えば父ヴラヂミルの死の直後のノヴゴロド人の殺害にも見ることができる。

このようにさまざまな人物が各々光と影を身にまとい、肉体を持った、生きた人間として年代記の中に立ち現われてくるのである。ロシア人の性格、その民族性と言ったものも、決して一夕になったものではなく、長い歴史の中で育まれたものであることを想うとき、その淵源を尋ね、ロシアの魂の成立の一端をうかがうこともまた、年代記をひもとくもの楽しみであり、喜びでもあろう。この年代記がそのような読み方をも可能にしてくれるものであることは疑いない。

更にこの年代記の随所にみられる、当時のキエフ・ルシがきわめて高い文化的政治的地位をもって当時のヨーロッパ及び東方の歴史の中で果たしていた役割もまた、鋭い読者の目を逃れることはないであろう。この意味でこの年代記はまた中世史の一つの重要な資料でもある。人類共通の重要な文化遺産であるというべ

きであろう。

さて古代ロシア語とその文化に興味をもった幾人かが年代記を読もうとして集まったのは昭和三十七年のことであった。そしてその結果が「古代ロシア研究」という雑誌の形で発表されたのは翌三十八年である。爾来研究会と「古代ロシア研究」は種々の紆余曲折を経て新たな会員を迎えつつ存続し、創立以来今年で丁度四半世紀の歳月を閲するに至っている。その活動の最初の半分は前述の原初年代記の訳注に充てられた。「古代ロシア研究」の創刊号（昭和三十八年）から第十号（昭和五十二年）所収のものがこれである。

今回江湖に問おうとするのは、これに全面的な改訂と補足を施したものであるが、仮に「古代ロシア研究」所収の訳及び訳注を「旧訳」と称すれば、これと今回の「改訂版」との間には、その作業の状況及び方針において若干の相違があることを、初めに断っておきたいと思う。

その第一は資料の問題である。当時は古代ロシア語についての興味が未だ一般的ではなく、入手できる文献もまた極めて限られていた。原初年代記の訳読も、天理図書館所蔵の「ロシア年代記全集」第一巻（一八四六年）を河合忠信氏の仲介によって見る事ができて、はじめて可能になったのである。旧訳がこれを底本にしているのは、このような事情によってである。その後文献学的に最もよい版とされる「ロシア年代記全集」第一巻第二版（一九二六年）イェー・エフ・カールスキー校訂による版が一九六二年に復刻されたので、今回の新訳はこれを底本としつつ旧訳の校訂に当たった。また旧訳の当時には名前は承知していても見ることのかなわなかった参考文献も、この間数多く復刻され、新しい文献と共に参照することができるようになって来た。このため訳注の部分についても全面的な見直しが行われた。

第二に翻訳の方針がある。周知のように原初年代記は、書写によって伝存する古文書には通有のことであるが、細部に様々なテキストの歪曲を含んでおり、従ってその解釈が必ずしも一義的には定めがたい箇所も決して少なくはない。このことから翻訳はそのような場合に後の研究者の為に解釈を定めることはせず、たとえ意味は少々通じがたくとも原文の直訳に近い形で訳出するべきであるとい

う考えが当時一部から強く主張され、これが全員の容れるところとなった。

しかしながら「古代ロシア研究」のように原文と対訳の形で出版するならばともかく、今回のように邦訳のみの場合には意味が不明になってしまうことが多い。従って今回は校訂に際して旧訳の方針は採らないことにした。これを可能にしたのが偏にこの間の古代・中世ロシア学の著しい進歩であることは、いうまでもない。

翻訳に際して、年号を除いた訳文に次の三種類の括弧を使用した。

( ) は訳文を読みやすくするため補足した部分である。

[ ] はテキストにはないが他の写本により補い訳出した部分である。

[ ] は公の番号を示す。これについては資料の「リュリク王朝の系図」を参照されたい。

今回の校訂では徹底的な訳文の見直しが行われたが、これによって旧訳にはいくつかの脱落や誤りが認められた。細部に至っては未だ見落としがあるかも知れない。これについては読者のご指摘を仰ぎたいと思う。

訳注にあたって大きな恩恵を被ったものに原初年代記の邦訳があるのは、言うまでもない。その第一は除村吉太郎氏の「ロシア年代記」である。これは現代ロシア語訳から訳出されたものであり、現在にいたるまで長く研究者の典拠となっている。第二は鹿児島大学の紀要に連載された木崎良平氏の「原初年代記考」である。これは文部省の科学研究費の交付を受けて行われた極めて精力的な研究の一部をなすものであるが、紀要という性格のため、入手が難しく利用しにくい点が惜しまれる。第三は中村喜和氏の「ロシア中世物語集」に含まれている抄訳である。これはきわめてよくこなれた平明な訳文による翻訳である。これらの翻訳がわが国のロシア年代記及び中世ロシア一般の研究の進展に大きな寄与をなした功績について今更喋々とする必要はないが、特にここに記して先達の学恩に感謝したいと思う。

この改訂の作業に携わったのは古代ロシア研究会の多くの会員であるが、系図の作製に責任を持った福井大学の浦井康男氏、索引の作製及び校正の全般に力を注がれた京都大学研究室の木下晴世氏の労を多としたい。

現会員以外で研究会創立以来多少にかかわらず『原初年代記』の訳注に携わった方々は、故菱山忍、植野修司（京都大学）、天野和男（神戸市外国語大学）、石戸谷重郎（奈良教育大学）、小野理子（神戸大学）、船山仲他（京都工芸繊維大学）の各氏である。ここに名を記してその労を謝したいと思う。

終りに出版を引受けて下さった名古屋大学出版会、及び同会の後藤郁夫氏に厚く御礼申上げる次第である。

なお、本書の刊行には、昭和62年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付をうけた。

山口 巖

「京大教養部報」No. 169 1988年2月15日。

### 昭和62年度宿泊研修を終えて

昭和62年度宿泊研修は11月7・8日の「浄瑠璃寺その他」によって、さしたる不都合もなく本年度のすべての予定を無事終了した。11回で参加人員は延べ311名、うち教官は延べ34名、学生数は延べ277名（内女子学生は延べ103名）であった。

これを昨年度と比較してみると、昨年は教官数は34名と変わらないが、学生数は延べ282名、うち女子学生が延べ66名であった。従って本年度の参加学生の数は、昨年度に比べて心持ち少ないようにも思えるが、全体としてほぼ同じと考えてよいと思われる。これに対して昨年と著しい違いを見せているのは女子学生の数である。女子学生は昨年度延べ66名に対して本年度は103名と約1.6倍になっている。これが何を意味するかにはわかに断定できないが、少なくとも女子学生も比較的気軽に参加できる雰囲気が醸成されつつあると言うことはできるであろう。これは教官と学生の緊密なコミュニケーションを回復するという一泊研修の目的